第 6 回　「貧困はなくせるの? 考えてみましょう。」

日時：6 月 15 日（水）　午後 7 時～午後 8 時 30 分
会場：龍谷大学　大阪梅田キャンパス　研修室
講師：野田 沙良
所属：特定非営利活動法人
アクセス－共生社会をめざす地球市民の会 理事・事務局員
URL http://www.page.sannet.ne.jp/acce/

特定非営利活動法人アクセス－共生社会をめざす地球市民の会（以下、アクセス）は、アジアでの市民レベルの交流や支援をすすめ、そのネットワークを広げていくことを通じ、貧困のない平和なアジアをつくりあげることを目的とした国際協力 NGO です。野田さんは、大学在学中からアクセスの活動に参加し、2005 年からはマニラ事務局で連絡調整やフェアトレード事業を担当しました。2007 年に帰国してからは、理事・事務局員としてフィリピンの貧困問題に取り組んでいます。講座途中では、ミニ・ワークショップを行い、受講者自らが NGO 組織やその支援のあり方について考え意見を交換しました。

講座概要

講座では、フィリピンの貧困の状況とその貧困を生みだす社会的構造が説明され、私たち日本人がそうした構造の一端を担っている点が指摘されました。また、問題改善に向けて行動する際に、まず貧困の構造と私たちとの関わりを知った上で、現地の人々の価値観とニーズの把握が支援活動の礎となる点、そして一時的な生活改善を目指すのではなく、長期的展望を持ち集団をエンパワーメントする必要性についても述べられました。

貧富の差が激しいフィリピンという国

野田さんは、国内の貧富の差が激しく貧困に苦しむ人が多いことは、フィリピンという国の大きな特徴であると指摘します。GNI（国民総所得、Gross National Income）をみると、東南アジアの中でも貧困国の一つであることがわかります。例えば、2009 年の比較では、1 人当たり購買力平価（GNI を人口で割ったもの）は、日本が 33,280 ドルであるのに対し、フィリピンは 3,540 ドルです*。都市では豪邸が建ち並ぶ地域もありますが、一日 2 ドル以下で生活する人々の割合は、人口の約 50 パーセントを占めています（世界開発銀行、2007 年）。貧富の格差は、都市部や農村部を含むフィリピン全土に見ることが出来ます。都市部の高級住宅街では数億円の豪邸が建ち並びますが、スモーキーマウンテンと呼ばれるゴミ捨て場での生活を余儀なくされる人も後を絶ちません。また、農村部では未だ地主制度が残るため、小作人として搾取され、貧しい生活を強いられる農民の姿も多く見受けられます。

* GLOBAL NOTE (http://www.globalnote.jp/database/country_data.php)

スモーキーマウンテンとスカベンジャーという職業

アクセスが重点的に支援する地域の一つに、スモーキーマウンテン（都市部のゴミ捨て場）があります。フィリピンでは、ゴミを焼却することは大気を汚染するとして法律で禁止されているため、全てのゴミは指定された地域に廃棄されます。都会に流出した農民が就業できない場合、そうしたゴミ捨て場に居を構え、積み上げられたゴミから換金可能な物を廃品回収業者に売ることで生計を維持します。こうした仕事に就く人々は、スカベンジャーと呼ばれ、フィリピン社会では蔑まされているのが現状です。

一度スカベンジャーとしてスモーキーマウンテンで生活すると、劣悪な環境から抜け出すことは困難となります。

当然衛生状態が悪く、危険な物も山積しているため感染症になることも珍しくありません。さらに、「ゴミ捨て場で働く汚い人、怠けている人」という人々の先入観は強く、差別によって教育を受ける機会や医療を受ける権利が奪われてきました。では、なぜ多くのスカベンジャーが、この国に存在するのでしょうか。

貧困の構造を考える

野田さんは、貧困の構造を知る必要があると指摘します。フィリピンの農村・漁村の抱える問題は、以下の 4 つに集約できます。①大土地所有制度が残り、農民の大半は小作人として働くことを強いられている。②多国籍企業によるプランテーション（大農園）の展開により、自給自足生活や地域社会のつながりの破壊が進んでいる。③日本をはじめとする近隣先進諸国の大型船が、フィリピン近海で近代的漁業を展開し、現地の人々の漁業を圧迫している。④大量の木材を伐採・輸出したため、環境破壊が生じている、という点です。そして、こうした諸問題は、フィリピンの貧困の構造を作り出す要因と密接に繋がっています。

貧困を生みだす構造は、豊かな生活を享受する日本人と決して無関係ではありません。1970 年以降、日本はフィリピンからも多くの木材を輸入してきました。2006 年にレイテ島・ギンサオゴン村で大規模な土砂崩れがおこり、小学校で授業を受けていた子どもたちが犠牲になるという痛ましい災害が発生しましたが、これは、無計画な森林の伐採が一因と考えられます。また、多国籍企業は、農村で暮らす人々から土地を借り上げ、効率のよいプランテーションを設営してきました。フィリピンの農民にとって、土地を貸して得られる現金収入やプランテーションでの雇用条件は魅力的であり、多くの人々が土地を手放す結果となりました。しかし、先進諸国へ安価な果物を提供し、利潤を出すには、人件費を含むコストの削減と効率を追求します。そのため、農民の雇用契約期間が過ぎると、農村部では失業者が急増しました。すでに共同体としての村は崩壊し、互助・扶助の制度は失われているので、土地を失った多くの農民が、衣食住を求めて都市部に移り住むという結果を招きました。

フィリピン政府は、国内の雇用創出、海外企業の誘致、農地解放といった問題について特段進展や打開策を見いだせない中、早急の対応策として、いわゆる“海外出稼ぎ”を奨励していますが、雇い主の暴力、売春の強要、家族との長期にわたる離別、家庭の崩壊といった多くの社会的問題をはらんでいることは周知の事実です。

アクセスが考える貧困撲滅にむけた活動

貧困を緩和するために私たちは何が出来るのでしょうか。野田さんは、NGO スタッフとして活動するには、現地のニーズを把握し、同じ人間として対等な関係を構築することが重要であると考えます。まず、現地の人たちから現状について直接聞き取り、問題を把握します。そして現地の人たちの持つ情報・経験・想いと NGO が持つスキルを合わせ、問題解決に向けて共に考えることが NGO 活動の第一歩です。アクセスでは、貧困に苦しむ人々の能力の向上を図ると同時に、そうした貧しい人々が協力できる場を作り、集団の力で問題を解決できるように人々をエンパワーメントしていくことを重視しています。例えば、貧困地域の住民の有志に保健衛生講習を受講してもらい、ヘルスワーカーを育成しています。そうした住民の中から生まれたヘルスワーカーが、住民の健康相談にのり、病気・感染症に対する予防知識を提供してきました。また、教育を受ける機会を失った青少年が集まれる場をつくり、歌や踊りの練習を行ったり、地域社会でのボランティア活動の参加を促したりしてきました。このように、人々自身が地域の問題解決に取り組めるような活動を行い、「自分たちの問題は自分たちで解決できるようになる」ことをめざした支援を行うのが、アクセスの活動です。同時に、貧困の構造の一端を担う日本で、フィリピンの現状を伝え問題意識と関心を喚起することも、アクセスの重要な活動の一つと考えています。

講座の最後に、「便利で物に溢れた日本の生活が、私たちにとって本当に『幸せ』で『豊か』な生活なのか」が問われました。貧困解決のために必要なことは、貧しい人々への支援だけではなく、貧困を生みだしている世界の構造を変えて行くことでもあります。その時、「他国の誰かを犠牲にして成り立っている、今の『豊か』な社会」を見つめなおし、地球に生きる全ての人々が「本当の意味で豊かで、幸せ」になれる社会のあり方を考えて行く必要がある、と話されました。